

コロナウイルス感染症

Canine Coronavirus Infection

コロナウイルスは1970年に発見され、1978年頃から世界中に流行しはじめたウイルス性疾患で、激しい下痢、嘔吐などの消化器症状を示します。このウイルスは初めは病原性の弱いウイルスと考えられていましたが、なぜか1978年を境に強い病原性を現しました。その原因は謎です。

伝染力が強く、症状はパルボウイルス感染症によく似ています。

原因

原因はコロナウイルスの感染です。感染は主にコロナウイルスにかかった犬の吐物や排泄物を舐めることによる経口感染で成立すると言われています。

症状

潜伏期は1～5日程度です。症状は、嘔吐と下痢、少し時間がたつと大変異臭を放つ血便を始めます。これらはパルボウイルス感染と似通っていますので、症状だけでは区別することが難しいのですが、一般にパルボウイルス感染症にくらべると軽度で致死率も低い病気です。

診断法

動物病院では、一般的に、問診、視診、触診、血液検査などを行い仮診断して治療を始めます。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認しますが、通常コロナウイルスを確定診断まで行うことはありません。

治療法

今のところコロナウイルスを殺せる薬はありません。一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、解熱剤、抗炎症剤、症状にあわせて点滴や栄養剤、止血剤の投与、輸血などの対症療法を行います。また、インターフェロンが用いられることもあります。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した犬は特に大量のコロナウイルスを排出しますので、他の犬への感染に十分注意してください。排泄物や食器、敷物などは焼却処分、あるいは消毒剤でよく消毒します。

退院あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬をきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理してあげて清潔な環境を保つことが重要です。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。コロナウイルスが犬の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。あるいは、仮に発病しても軽症ですみます。

メモ

仔犬が生まれたら、母犬から初乳が与えられ、コロナウイルスに抵抗する力をもらいます。しかしながらこの力はいつまでも続くものではなく数カ月でなくなってしまうので、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。また、母犬のワクチン接種の有無が仔犬に大きく影響します。妊娠前には必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムを行いましょう。